

【論 文】

「ミルクで教理を育せしめよ」<sup>\*</sup>  
—A・ヴァリニャーノの教育思想をめぐって—

李 梁

はじめに

2015年3月17日は、世界宗教史上の奇跡といわれた「信徒の発見」150周年にあたる節目の年である。その数日後の21日に、筆者は長崎県南島原市の口之津を訪ねた。1579年7月25日、この盛夏の日に、イエズス会東インド巡察師A・ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano、漢名は范礼安、1539–1606）がこの小さな港町から上陸し、はじめて日本の土を踏んだのである。この来日を記念するため、2011年、口之津漁港公園の一角に、ヴァリニャーノの生家であるイタリアのキエーティ市（Chieti）から寄贈された銅像が建てられた。強い意志力と深い愛情を湛え、かつ痩せこけたその顔を仰視しながら、深い感動を覚えたことを今でも鮮明に覚えている。

フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸した1549年から、18世紀後半迄、主としてカトリックの新興修会のイエズス会による宣教活動は、同時代の東アジア諸国にカトリック信仰とその神学思想を伝え、大いなる思想的衝撃を与えた一方、また宣教の手段として伝えたヨーロッパ・ルネサンス期の科学技術諸芸は、近世東アジア固有の知識体系（朱子学）—知識構造・方法論・認識論—を動揺させ、新しい知識体系の発生を誘発するとともに、精神信仰、学問方法および自然観、世界観

---

<sup>\*</sup> イエズス会ではトマス主義を信奉する修道会として知られる。従って、イエズス会士は大抵トミストだと思われます。ヴァリニャーノの常套句として発する「ミルクで教理を育せしめよ」というのも以下のように、トマスの『神学大全』にその影響の一端をみいだすことができるだろう。中国広州中山大学哲学系梅謙立（Prof. Thierry Meynard）教授によるラテン語英訳とご教示に感謝する。

While at the Santa Sabina studium provinciale Thomas began his most famous work, the *Summa theologiae*, [34] which he conceived of specifically as suited to beginning students: “Because a doctor of Catholic truth ought not only to teach the proficient, but to him pertains also to instruct beginners. As the Apostle says in 1 Corinthians 3: 1-2, as to infants in Christ, I gave you milk to drink, not meat, our proposed intention in this work is to convey those things that pertain to the Christian religion in a way that is fitting to the instruction of beginners.” (*Summa theologiae*, I, 1, prooemium: “Quia Catholicae veritatis doctor non solum profectos debet instruere, sed ad eum pertinet etiam incipientes erudire, secundum illud apostoli I ad Corinth. III, tanquam parvulis in Christo, lac vobis potum dedi, non escam; propositum nostrae intentionis in hoc opere est, ea quae ad Christianam religionem pertinent, eo modo tradere, secundum quod congruit ad eruditionem incipientium.”)

といった一連の重大な思想問題を惹起していたと見做されている。

ここでいう「近世東アジア」は、狭義的には、すなわち「中国では宋、元、明、清、朝鮮では朝鮮王朝、日本では江戸時代を指す」<sup>1</sup> ことである。近世東アジアにおける知の空間は、突き詰めて言えば、儒学的経学、つまり朱子学という知識体系によって紡がれた政治、または学問思想の世界だったと言ってもよからう。

ところで、中国をはじめ、東アジアにおいて、「義理の学」と唱道された儒学的経学、つまり朱子学の本格的な解体は、19世紀後半以後、新たに伝来した西学、とくに「近代西洋の政治体制」の圧倒的な勢いに押された清末民初期であるが、その端倪は、早くも16世紀末から17世紀前半にかけての明末清初期に現れたのは、周知のことである。いわば、明末王学左派の矯激さへの反動として興った復古主義の清代の経学は、考証（または考拠）という方法論を高く掲げ、もはや知識構造、方法論ないし認識論において、伝統的な「義理の学」としての経学とは大いに趣を異にした。言い換えれば、学問思想（経学）の重心は、従来の「義理の考証」（義理の格致ともいう）から「物理の考証」（物理の格致）へとパラダイムシフトされた、ということである<sup>2</sup>。その証拠として、黄宗羲（1610–1695）、梅文鼎（1633–1721）、王錫闡（1626–1682）、戴震（1724–1777）らに代表された、天文暦算学を中心に据えた清代の経学、とりわけ乾嘉学派の考証学は、そうした傾向がとくに強い<sup>3</sup>。

従来、こういった思想史上における革命的転回に対し、清代学者による自己学問の正統化、明学（特に朱子学の形骸化、王学左派の狂禅化）への反動、清学の「内在的理路説」（余英時）、イエズス会の宣教影響（梁啓超、胡適）、という違う角度からの解釈や見解が示されている。いずれにせよ、近世東アジアにおけるこれほど巨大な知の地殻変動は、16世紀から18世紀にかけて、イエズス会をはじめとするカトリック諸修道会の宣教運動、とりわけそれに伴って行われたヨーロッパ・ルネサンス期の新知識の伝播がなければ、やはり考え難い。

だが、知識の伝播という営為は、伝える側と受け皿との異質性のゆえ、複雑な様相をもつ歴史的

<sup>1</sup> 土田健次郎編『近世儒学研究の方法と課題』汲古書院、二〇〇六年、「はじめに」i頁。

<sup>2</sup> 房徳隣「西学東漸と経学的終結」朱誠如、王天有主編『明清論叢』第二輯所収、紫禁城出版社、二〇〇一年を参照。

<sup>3</sup> この点について、内外の学界では多岐にわたる議論が行われ、論点が交錯している。管見では、内藤湖南「先哲の學問」『内藤湖南全集』第九卷所収、筑摩書房、1969年；王萍『西方暦算学之輸入』中央研究院近代史研究所專刊（一七）、1971年修訂再版；朱維錚「十八世紀的漢学与西学」同氏『走出中世紀』復旦大学出版社、2007年、「導言」同氏主編『利瑪竇中文著譯集』復旦大学出版社、2007年；湛曉白、黃興濤「清代初中期西学影響經学問題研究述評」黃愛平、黃興濤主編『西学与清代文化』中華書局、2008年；ベンヤミン・エルマン（B. A. Elman、艾爾曼）「道学之末流—從宋明道学至清代考証学的轉變」「十八世紀的西学与考証学」同氏『經学・科学・文化史 艾爾曼自選集』中華書局、2010年などの論考から見られる。より詳しい研究は、B. A. Elman, *On Their Own Term, Science in China, 1550–1900*, Cambridge: Harvard University Press, 2005の第三章“Evidential Research and Natural Studies”を参照。なお、『西学東漸と東アジア』東京大学出版会、2015年も参照されたい。とくに当書の編集者川原秀城が「哲学Philosophiaを中心とした西学の東漸がなければ、明学から清学への思想変革はない」（同氏最終講義レジュメ、2015年2月21日、於東京大学文学部）と言い切ったところは興味深い。

事象である。例えば、一般に西洋の文脈において、知識とは、長い歴史をもち、意味合いも多岐にわたった概念として、人間の知を獲得する認識論や方法論と密接な関係をもつものだと考えられている。そして、そもそも知識論は、宇宙論と倫理論と並んで、従来、西欧の伝統的学知における三大論のひとつとして、徳性の東洋（東アジア）とは、通約不可能性（incommensurability）という性質をもつものだと考えられている。したがって、そういった西洋的学知が近世東アジアの伝統教養と果たしてどう対峙していたのかは、巨大で複雑な問題群となるであろう。

筆者は、これまで漢訳西学書を媒介に、16世紀末期から18世紀の後半にかけて、主としてイエズス会が伝えた「西学」の東アジアにおける伝播とその影響を研究課題としてきた。研究所見から、いわゆる西学理解の重要なステップの一つとして、まずその知的ルーツ、すなわち知の系譜学的究明がきわめて重要だと考えるようになった。そして、知識の生成と伝授は、ひとえに制度的教育という知的営為に負っていると言ってもよい。すると、ヨーロッパ・ルネサンス期という歴史的背景の中で孕み育てられたイエズス会の教育理念、とくにその教育実践の活動（各種学校の設立、運営並びに教学の内容）に対する史的考察は、16世紀以後、東アジアに伝播されたその新しい知識の具体的な検証、かつその歴史的意義の再吟味、再評価にとっても、避けて通れないきわめて重要な作業の一つではないかと思われる。

この拙論では、イエズス会の東アジアの宣教および教育活動のグランドデザイナーとして、様々な困難な局面の中で優れた才智と手腕とを存分に発揮し、とりわけイエズス会の東アジアにおける教育活動の立案と運営に腐心したヴァリニャーノを軸に、彼の教育思想と実践活動の考察を通して、近世東アジアにおける「西学」伝播の歴史的事象の一端を読み解いてみようとするものである。

## 一、イエズス会と教育

1534年8月15日、パリ郊外のモンマルトの丘で、イグナチオ・デ・ロヨラ（1491–1556）は、ザビエルなど五人の同志を率いて、「清貧、貞潔、エルサレム巡礼」という三つの誓願を立てて、イエズス会というカトリックの新しい修道会が結成された。6年後の1540年、イエズス会は、教皇パウロ三世（1543–1549）の回勅によって正式に認可された。創始者のロヨラは、波瀾に富んだ彼個人的体験により、イエズス会成立直後から、教育重視の姿勢を鮮明に打ち出した。それは、『靈操』（*Exercices Spirituels*, 1548）、『イエズス会会憲』（*Constitutiones Societatis Iesu*, 1559）、とりわけ『イエズス会学事規程』（*Ratio atque institutio studiorum Societatis Iesu*, 1599、通常 *Ratio studiorum* と略称。図1参照）など一連の重要文献からも、また各種の学校設立と運営の実態からも窺い知ることができる。

ここで、イエズス会の教育理念とその特質の理解の一助として、まずそういった重要な歴史的文献の概要、並びにその歴史的意味について簡単に触れておこう。

まず、ロヨラの『靈操』をみてみよう。一見して、『靈操』は、ロヨラの二度にわたる霊的体験

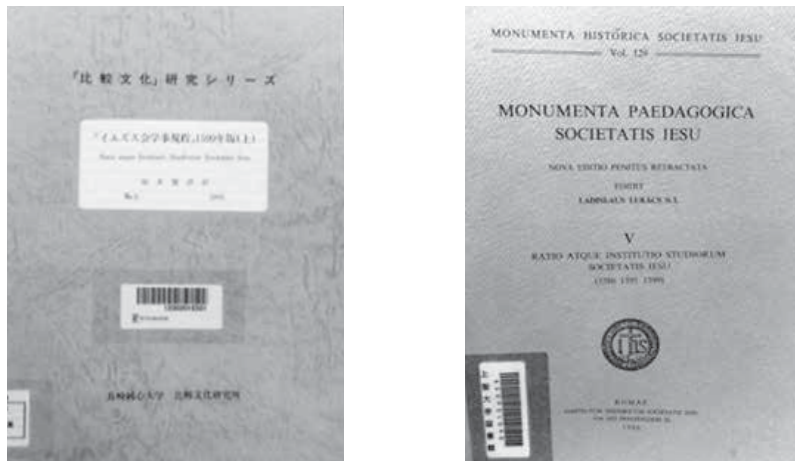


図1、邦訳『イエズス会学事規程』（1599年版、長崎純心大学、比較文化研究所未公開刊行版）とラテン語刊行版<sup>4</sup>

（一度目は、パンプローナ城でフランス軍との戦闘による負傷の療養中で得た「靈動弁別」の体験、二度目は、いわゆる「マンレサの照明」）からの産物のようにみえるが、実は、むしろ、中世ヨーロッパのカトリック諸修道会の靈的生活の伝統を受け継いで、更にそれを発展して体系化されたものである。ロヨラは、マンレサでの靈的体験を契機に、まだスペイン修学中で『靈操』を執筆しはじめ、そして、パリ大学在学中にほぼ完成し、1548年にローマ教皇パウルス三世の公認を得て刊行されることとなった。

イエズス会の入会希望者は、まず『靈操』の四週間修練のプログラム、つまり「第一週は罪の認知と痛悔、第二週はキリストの救済活動の観想、第三週はキリストの受難の観想、第四週はキリストの復活の観想」を必ず実践せねばならない構造となっている<sup>5</sup>。『靈操』は、イエズス会士にとって、「より大いなる神の栄光のために」という究極な目的を達成するための心構えや行動規範とともに、最高な精神的指導綱要でもある。

次に、『イエズス会会憲』を繙いてみよう。ロヨラが存命中、最大なエネルギーを注いだのは、『イエズス会会憲』そのものである。ロヨラは1539年頃より『イエズス会会憲』の草案となる『基本精神綱要』と『イエズス会会則第一草案綱要』を起草し、度重なる増改、修正をへて、彼が逝去（1565年7月31日）直前に漸く完成をみたのである。イエズス会の教育理念について、『イエズス会会憲』第四部の序文に次のように述べている。「本会が直接目指す目的は、会員と隣人の靈魂が創造された究極目的に到達できるように、靈魂を助けることである。そのために、生活の模範のほか、学識とそれを伝える方法が必要となる。したがって、会員に必要な土台、すなわち自己を否定し、善徳へと進歩するために必要な土台が据えられたと思われるならば、わが創造主なる神をよりよく知り仕えるために、学識の建物を築き、それを用いる方法を身に着けるように努めなければな

<sup>4</sup> *Monumenta Paedagogica Societatis Iesu*, vol. 5, Rome: Institutum Historicum Societatis Iesu, 1965.

<sup>5</sup> 高橋裕史『イエズス会の世界戦略』、講談社、2006年。55～58頁参照。



らない」、という<sup>6</sup>。

会憲第四部は、のべ17章からなる。学院、大学の創設、修学士の生活規程から学習内容、大学で教える科目と講義において解説すべき書物、課程と学院などかなり細かく規定されており、後の『学事規程』を垣間見るような内容となっている。この中で、とくに際立っているのは、古典文学と言語教育の問題である。古典文学は、文法のほか、修辞学、詩、歴史をも意味する。言語教育の問題というのは、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語は勿論、地域差や有益性の見地から、カルデア語、アラビア語、インディアスの言語を教える教師が必要に応じて配置するよう記されている。第12章449Bに、「学院と大学において、ムーア人やトルコ人のもとに行く人物を準備する計画がある場合、アラビア語あるいはカルデア語が適当であろう。しかし、インディアスの人々のもとに送るならば、インディアスの言語が適切であろう。同じ理由で、他の地域には他の言語がより有益となるであろう<sup>7</sup>」。後に、ヴァリニャーノの「適応政策」の思想的源流がまさにここから見出すことができるのではないだろうか。

最後に、概略的に『イエズス会学事規程』（以下、「学事規程」と略記）に触れてみたい。長い年月をかけて練り上げられ、1599年、正式に公刊をみた『学事規程』は、ヨーロッパの近代教育に深遠なる影響を及ぼした極めて重要な歴史的文献の1つである。イエズス会の教育理念とその方法論について、様々な面において詳細を極める規則を設け、とりわけ神学、法学、人文学および医学を中心学科とする「パリ方式」を採用した点は際立った特徴であろう。ロヨラは、神学の基礎に、ラテン語文法、修辞学とギリシア・ローマ古典学を据えたほかに、ルネサンス時代の人文主義の精神をも取り入れた点が、彼の時代を超越する洞察力と知見とを鮮やかに示していると言えよう<sup>8</sup>。これも、ロヨラがただ一人の宗教指導者に止まらず、偉大な歴史的人物の1人となりえた訳でもあろう。

イエズス会の初等教育は、基本的にすべての人々に対して開放的である。とはいえ、学習の深化とともに、生徒の資質、とくに徳性がイエズス会に向いているかどうかは、またはどのような学習をさせるか、あるいは辞めさせるか、段階を踏んで厳格に選抜していく。例えば、最も重要な神学の勉強において、たとえ前年度において、神学の学習を認めても、4年目に誰を認めるかはさらに厳格に判別される。「最後に、天分の面ではそれほど注目に値しないとしても、指導力または説教の能力の面、および、『会憲』が要求する、かの完全な神学的知識[の不足]を補うであろうと思われるほど傑出した徳という面で、注目すべき者がいる場合、そして、もし彼が神学の課程を全うするならばイエズス会の利益になるであろうと判断される場合、当然この者に対して、あらかじめ顧

<sup>6</sup> イエズス会日本管区 編訳『イエズス会会憲』、南窓社、2011年、131頁。

<sup>7</sup> 同上、165頁。

<sup>8</sup> 『学事規程』の成立および「パリ方式」についての討論は、次の文献が参照される。Ladislau Lukacs, S.J., etc. *Church, Culture & Curriculum: Theology and Mathematics in the Jesuit RATIO STUDIORUM*, Saint Joseph's University Press, 1999 Gabriel Codina Mir, S.I. *Aux sources de la Pedagogie des Jesuites le 《MODUS PARISIENSIS》*, Roma Institutum Historicum S.I.1968.

問らと本件を協議したうえで、神学〔の学習〕の第4年目を認めることもできる」<sup>9</sup>。

前にも触れたが、イエズス会の教育的特質は、スコラ哲学、神学のほかに、ルネサンス時代の新科学諸芸をも重視している。とくに数学の教育重視はそれを物語っているように思われる。「哲学〔課程〕の第二年目に、全ての哲学課程生は、学級においておよそ4分の3時間、数学の講述を聴講しなければならない」<sup>10</sup>。「数学教師は、自然学学年生に対し、学級で約4分の3時間、エウクレイデスの『幾何学〕原論』を説明しなければならない。さらに、学生たちがそれ〔＝幾何学原論〕に2ヶ月ほど従事した後では、地誌や天球など、彼らが喜んで聞くのが常である事どもに関する原論を加えるものとし、それをエウクレイデスとともに、同じ日にか、あるいは一日おきに教えるものとする」<sup>11</sup>。それから、段階を踏んで教科内容が違う構成となっているのも、特徴的である。少し長い、理解の一助のため、一部を引用してみる。

#### 【第一年目には何が教えられ、何が省かれるべきか】

第9条 1、第一年目には、教師は『論理学 (Logica)』を説明するものとする。最初のおよそ2ヵ月ほどの間は、口述筆記によるよりはむしろ、トレドあるいはフォンセカ〔の著した提要〕から比較的必要と思われるものを説明することによって、論理学の概論を教えるものとする。

5、さらに、〔哲学課程の〕第二年目は自然学に関する事柄にそっくり充てられることになるので、第一年目の終わりのほうでは、この学問〔＝自然学〕についての十全な議論が企てられるものとする。

#### 【第二年目には何が教えられ、何が省かれるべきか】

第10条 1、第二年目には、『自然学』の8つの巻、『天体論 (de Caelo)』の諸巻および『生成・消滅論 (de Generatione [et corruptione])』の第1巻を説明するものとする。『自然学』8巻中、第7巻と第8巻の本文については提要を用いて教え、第1巻のなかの、古代人たちの諸説について述べた部分も同様とする。第8巻においては、エイドスの数、自由、および第一動者の無限性については何も論じず、これらは〔第三年目に扱う〕『形而上学』のなかで、しかもただアリストテレスの意見にのみ基づいて議論することとする。

#### 【第三年目には何が教えられ、何が省かれるべきか】

第11条 1、第三年目には、『生成・消滅論』の第2巻、『靈魂論 (de Anima)』および『形而

<sup>9</sup> 坂本雅彦訳『イエズス会学事規程』(1599年版)長崎純心大学比較文化研究所(未刊版)(上)。

<sup>10</sup> 同上。

<sup>11</sup> 同上。

上学 (Metaphysica)』の諸巻を説明するものとする。『靈魂論』の第1巻中、古代の哲学者たちの諸説については概略的にひとつと触れるにとどめる。第2巻では、感覚器官について説明する際、解剖学その他、医者の方へ逸れていかないようにする<sup>12</sup>。

以上の学習内容から、イエズス会教育における知識構造の一端をより具体的に知ることができるだろう。なお、学習の成績判定も特徴的である。「教師は、アルファベット順に作成した生徒たちの成績表を学習監に手渡さねばならない。(中略)この成績表の中で、教師は生徒たちの程度をできるだけ数多く区別しなければならない。すなわち、優・良・可・疑・原級留置および退学処分<sup>13</sup>の区別である。なお、これらは1, 2, 3, 4, 5, 6の数字によって示してもよい」とは、それである<sup>13</sup>。生徒への評価において、学習成績以外、性格的または能力的に雄弁さを好む一方、また新奇さや出喋りすぎのもよく見られない、そのきめ細かさが見て取れるであろう。ローマのイエズス会文書館に当時の生徒の成績カードが所蔵されて、上のように生徒への数段階の評価が記録されており、非常に興味深い。

さて、以上、イエズス会の教育理念と関連する3つの重要文献をみてきたが、その理念の元で、イエズス会の教育活動または実践がどのように展開されたのか。以下、幾つかの事例に基づいて、それについて概論してみたいと思う。

史料によれば、16、17世紀の交替期に、イエズス会は、すでに245箇所<sup>14</sup>に上る各種学校を運営している。第五代目の総長、ヴァリニャーノのローマ学院時代の親友でもあったクラウディオ・アクアヴィヴァ (1581–1615) が亡くなる時、その数が更に372か所にのぼった<sup>14</sup>。より具体的にみれば、ヨーロッパ以外の世界各地で設立された各種のイエズス会学校は、ブラジルに17か所、インド (ゴアとマラバー管区) に30か所、東アジア (日本、マカオ、中国) には10か所にのぼった。特にザビエルが作ったインドゴアの聖パウロ学院、並びに、ヴァリニャーノが1593年設立したマカオの聖パウロ学院<sup>15</sup>は、ヨーロッパ以外の地域における最も重要な教育機関である。いわば、16世紀から18世紀の中葉にかけて、こうした学校設立の実績からみて、イエズス会が世界規模の知 (教育) のネットワークを構築していたと言っても過言ではない。さらにいえば、事実上、それは、後の歴史の中にみえた本格的な東西文化の遭遇と衝突、融合と排斥、包摂と峻拒といった歴史的事象を生む

<sup>12</sup> 同上、第9、10、11条。

<sup>13</sup> 前掲邦訳『イエズス会学事規程』(下) 第38条。

<sup>14</sup> ウィリアム・バンガート『イエズス会の歴史』原書房、2004年、126～128頁。

<sup>15</sup> マカオ聖パウロ学院について、J. Witek ed., *Religion and Culture: an International Symposium Commemorating the Fourth Centenary of the University College of St. Paul, Macao*, 1999；高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店、2001年；李向玉『漢学家的揺籃 澳門聖保禄学院研究』中華書局、2006年；戚印平『澳門聖保禄学院研究』社会科学文献出版社、2013年；魏若望著、郭頤頓訳『范礼安：一位耶穌會士肖像』澳門利氏学社、2014年；湯開健「澳門の西方教育」同氏『天朝異化之角：一六—一九世紀西洋文明在澳門』下巻、暨南大学出版社、2016年などがある。

契機であったと言えよう。

イエズス会の教育理念およびその実践において、とりわけ象徴的な存在はローマ学院 (Collegio Romano) である。1551年に創設されたこの学院は、ロヨラの特別な計らいもあって、たちまちイエズス会の最も重要な教育機関となった。それは、クラストファー・クラヴィウス (Christopher Clavius、漢字名は丁先生で知られる、1537–1612) をはじめ、クリストフ・グリーンベルガー (Christoph Grienberger、1561–1636)、クリストフ・シャイナー (Christoph Scheiner、1575–1650)、アタナシウス・キルヒャー (Athanasius Kircher、1602–1680) といった当時ヨーロッパで屈指の教授陣を擁していたことから見てわかる。そして、ガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei、1564–1642) も一時客員教授を務めたことがあるほど、「世界の集約」と称賛されたように、当時、すべてのイエズス会学校のモデルとなったのみならず、世界最高のアカデミー機関の一つと言っても過言ではない。ヴァリニャーノのほかに、後に東アジアの宣教活動の中で名高いマテオ・リッチ、ジュリオ・アレニ (Giulio Aleni、漢名は艾儒略、1582–1649)、アダム・シャル (Johann Adam Schall、漢名は湯若望、1592–1666)、マルティーニ (Martino Martini、漢名は衛匡国、1614–1661) およびカルロ・スピノラー (Carlo Spinola、1564–1622) は、あるいは正規学生、あるいは短期の研修生として、そこで勉学に励んでいた<sup>16</sup>。ほかに、「近代西洋哲学の祖」とみなされたデカルトや、同時代の西欧社会で輩出された各界の高名な面々がイエズス会系の学校卒業生だったことも、イエズス会の教育上における成功、または西洋近代教育への貢献として語り継がれている<sup>17</sup>。

## 二、ロヨラからヴァリニャーノへ

『イエズス会学事規程』のように、近代西洋の教育史に深い影響を残したイエズス会の教育理念とその実践活動を全面的に分析し、論述することは別稿に譲が、小論ではイエズス会の教育理念の基本的精神を定めたイグナチオ・デ・ロヨラ、並びに「ザビエルの偉大な継承者」であり、「適応政策」を案出した巡察師ヴァリニャーノに照準を充て、彼らの生い立ちと教育の背景と教育実践を考察し、その教育思想の精髓を探ることにした<sup>18</sup>。

<sup>16</sup> 前掲『イエズス会の歴史』129–130頁、Gianni Criveller (柯毅霖), *Preaching Christ in Late Ming China*, Taipei: Ricci Institute, 1997, 中国語訳は、王志成ほか訳『晚明基督論』四川人民出版社、1999年、12–14頁参照。

<sup>17</sup> イエズス会教育の成功譚として挙げられた人物については次の文献が参照されたい。久保田静香「デカルトとイエズス会学校人文主義教育—よく書くために—」早稲田大学大学院文学研究科フランス文学専攻研究誌『フランス文学語学研究』第二六号、二〇〇七年。

<sup>18</sup> ロヨラの生涯について、主としてイグナチオ・デ・ロヨラ著、門脇住吉訳・解説『ある巡礼者の物語—イグナチオ・デ・ロヨラ自叙伝』岩波書店、二〇〇〇年、同訳者による訳・解説『霊操』岩波書店、一九九五年。ヴァリニャーノについては、A. Tamburello, M. Antoni, J. Üçerler, M. D. Russo, eds., *Alessandro Valignano S. J. Uomo del Rinascimento: Ponte tra Oriente e Occidente*. Rome: Institutum Historicum Societatis Iesu, 2008; M. Antoni, J. Üçerler, “Alessandro Valignano: man missionary, and writer,” *Renaissance Studies: Journal of the Society for Renaissance Studies*, Vol. 17 No. 3, 2003.



イエズス会の創始者イグナチオ・ロヨラは、ヴァリニャーノと類似する点が多い。例えば、ともに貴族の出身だが、神への回心に至るまでの血気盛んな若かりし頃、むしろ名誉欲と虚栄心に満ちた日々を過ごしていた、という。

スペイン・バスク生まれのロヨラは、神秘的体験（靈的修行）と知的生活（知の探究）、とりわけパリ大学で受けた人文主義と神学、哲学の教育がかの「超自然の合理主義」（神の神秘的靈性と最高の知識への追求）の形成に大いに役立ったと思われる。ロヨラの教育重視の姿勢も、上述した彼の教育経歴とキリスト教的自然観による影響の現れとでも言えよう。ロヨラによって構想された一五五六年のイエズス会の教育課程は、ラテン語、現地語、ギリシア語、修辞学、詩学、歴史学、哲学、倫理学、自然学、数学、神学（スコラ神学、弁証神学）、法学、医学を含み<sup>19</sup>、人文主義と近代の合理主義を重んじる姿勢が鮮明に示されているとみてよい。

一方、ヴァリニャーノは、イタリア・アブルッツォ州の都市キエーティ（Chieti）の枢機卿大司教という北欧系の貴族出身であり、史料の欠如のため、大学までの足跡は殆ど不明というものの、恵まれた環境の中で良好な教育を受けて、エリートの道を順当に進んだとみてよからう。1557年、ヴァリニャーノがパドヴァ大学から「法学博士」（Laurea dottore in diritto）の学位を修得している。

ルネサンス文化の中心地のひとつであるヴェネツィアの近くにあるパドヴァ大学（1222年創立）は「あらゆる完全な知識の揺籃<sup>20</sup>」と言われ、地動説を唱道したコペルニクス（Nicolaus Copernicus、1473－1543）が学び、ダンテ（Dante Alighieri、1265－1321）やガリレオ・ガリレイも教鞭をとったことのある、イタリア二番目に古い名門校である。当時、イタリアの大学編成では、法学部は、神学部、医学部と並んで上位の学部へ属し、学生達は、主として『ローマ法大全』（ユスティニアヌス法典）の研究に努めていた<sup>21</sup>。

当時のある報告書に、パドヴァ大学の学生達は「若く、気まぐれで、大胆、かつ自由であり、熱しやすく、金使いが荒いが分別があり、悪魔的だ<sup>22</sup>」と記されている。ヴァリニャーノも例外ではなかった。1561または1562年、ヴァリニャーノがパドヴァに戻り、学業を続けることにしたが、1562年11月末、ある不愉快な諍いで逮捕監禁の憂き目に遭った。このことは、彼のイエズス会加入（1566）の要因の一つとでもなったようである。

イエズス会加入後の翌1567年5月18日、ヴァリニャーノは早速ローマ学院に入学し、クラストファー・クラヴィウスに師事し、哲学、物理学、数学を習い、更に1670年からローマのクイリナーレの丘にある聖アンドレ教会の助修士をする傍ら、引き続き神学の勉強を続けた。こうして、パドヴァ大学で教会法を中心に訓練を受けたヴァリニャーノは、ローマ学院で人文主義およびルネサン

<sup>19</sup> アンセルモ・マタイス、小林紀由共著『神に栄光 人に正義—聖イグナチオ・デ・ロヨラとイエズス会の教育—』イエズス会日本管区、一九九三年、六八－六九頁より。

<sup>20</sup> 「アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノの生涯」〔解題Ⅰ〕『日本巡察記』平凡社、1973年、238頁。

<sup>21</sup> 児玉義仁『イタリアの中世大学—その成立と変容』名古屋大学出版会、2007年、P. D. Negro, ed., *The University of Padua: Eight Centuries of History*, Signumpadova, 2003.

<sup>22</sup> 同注11。

ス期の諸学芸をも修得するようになった。こうして、明晰な判断力、強靱な意志力、柔軟性のある思考力の持ち主となった彼は、後にイエズス会東インドの巡察師として、諸々な難題の解決、とりわけ「適応主義」の貫徹のため、数々の学校創設にその才知を存分に発揮したのである。

一般に、1549年のザビエルの来日から、1640年、徳川幕府による禁教令の頒布までの約一世紀の長きにわたって、いわゆる「キリシタン時代」として知られている。この長き時期において、主として、日本でのカトリック宣教運動を担ったのは、ほかならぬイエズス会であった。イエズス会の宣教運動の中で、初期頃の困難や試行錯誤－例えば言語習得の困難さや、その現れとでもいうべきザビエルのDeusの誤訳問題など－があったものの、一貫して最もエネルギーを注いだのは、教育事業である。そして、その制度的な展開は、以下のような三つの時期に区分することができる。第一は、ザビエルが来日した1549年からヴァリニャーノが宣教方針を定めた1579年頃まで、第二は、キリシタン学校の制度的確立が図られた1579年頃から、変更がなされた1601年頃まで、第三は、1601年以降から宣教が厳禁される40年始め頃まで、という三つの時期である<sup>23</sup>。ここで、拙論では、主として第二の時期におけるヴァリニャーノの宣教方針、およびイエズス会学校の設立という一連の史実態を中心に検証し、その教育思想を探ってみたい。

イエズス会巡察師として、ヴァリニャーノの初の日本訪問は、1579年7月25日から82年2月20日まで、他の二度の滞在は、それぞれ1590年7月21日から1592年10月9日まで、1598年8月5日から1603年1月15日まで<sup>24</sup>、あしかけ約10年も日本滞在中であった。『日本巡察記』（松田毅一ほか訳、平凡社、1973年）、『東インド巡察記』（高橋裕史訳、平凡社、2006年）『日本イエズス会士礼法指針』（矢沢利彦ほか訳、キリシタン文化研究シリーズ5、昭和45年）といった著書が示したように、ヴァリニャーノは、インド、東アジア、とくに日本の事情を熟知していた。初来日後、ヴァリニャーノは、いち早く日本宣教の問題点を浚いだし、日本人司祭の養成のため、翌1580年10月に、臼杵で会議を開き、同地に修道者のためにノビシアド（修練院）を、有馬と安土にセミナリヨを設け、そして豊後府内の教会を高等教育機関のコレジヨに昇格させることが決議された。

なぜヴァリニャーノが来日早々、直ちに各地で各種学校の設立に着手したのか。それは、ヴァリニャーノの明晰な現実認識と思想的柔軟さと無関係ではない。それはともかくとして、セミナリヨは、六年課程で三段階のカリキュラムからなり、ラテン語、自然科学、日本文学、音楽、絵画、印刷術が教えられた。コレジヨでは、司祭養成のための神学と哲学が教授され、のち準管区長ペドロ・ゴメス（Pedro Gómez、1533–1600）編纂の要綱 *Compendium* が講義されるようになった。『講義要綱』は、天球論、アリストテレスのアニマ論ないしカトリック信仰体系の概説から纏めら

<sup>23</sup> 梶村光郎「日本における耶蘇会の学校制度」解説『日本巡察記』平凡社、一九七三年、三頁。

<sup>24</sup> Marisa Di Russo “Cronologia Valignanea,” A. Tamburello, M. Antoni. J. Üçerler, M. D. Russo, eds., *Alessandro Valignano S. J. Uomo del Rinascimento: Ponte tra Oriente e Occidente*. Rome: Institutum Historicum Societatis Iesu, 2008, pp.369~383. 同年表はCentro Internazionale Alessandro Valignanoのwebsite: <http://www.valignano.org/it/> にも掲載。



図二、ペドロ・ゴメス編述『イエズス会日本コレジヨコンベンティウム講義要綱』  
(長崎純心大学キリシタン博物館所蔵)

れ、ヨーロッパ・ルネサンス期の科学思想を直に日本に紹介する画期的な著書である(図2)。とくに天球論は、小林謙貞によって『二儀略説』として鎖国以後も長崎を中心に伝えられ、天文学の発達を大いに促したことは、特筆すべきである<sup>25</sup>。イエズス会の学校で勉強した人々は、かの有名な天正遣欧使節の面々のほか、戦国末期から日本と中国で大活躍したポルトガル人ジョアン・ロドリゲス(João Rodrigues、漢字名は陸若漢、1561か—1633)もその一人である。

1561年から1583年までのわずか20年あまり、イエズス会は日本ですでに200余りの教会付属の学校を設け、ヴァリニャーノが好む表現で言えば、「ミルクで教理を育て」宗教教育を助けたのである。従来、日本のコレジヨでも、ヨーロッパのイエズス会学校のように古典諸学科の学習が課せられたが、ヴァリニャーノ来日後、彼の教育方針によって、布教中心のいわゆる「小コレジヨ」制に重きを置かれた。小コレジヨで子ども達は日本語とラテン語の読み書き、唱歌、宗教および礼儀作法、一般教育を受けると、聖職者になる素質のある少年たちには初等セミナリオへの進学を準備させるという二つの目的がある。ヴァリニャーノは、セミナリオの校内則を起草し、自ら講義を行っていた。なお、セミナリオと同じく、府内のコレジヨに対しても、教則や教科課目案を規定していた。つまり、必要性和時勢に応じて、ラテン語文法、日本語学、民族学、宗教学、哲学、神学の講義を行い、とくに学年に応じて、哲学と神学の授業を行ったのである。言い換えれば、原理原則を踏まえながら、現実の必要に応じて臨機応変に独自色を打ち出していく、という柔軟な現場主義が特徴である。戦国末期、イエズス会を取り囲む環境が激しい変転の中、短い期間とはいえ、イエズス会の教育事業を見事に軌道に乗せて制度化し、多大な成果を上げることができたのは、ヴァリニャーノの「適応主義」の方針に負うところが大きい。

ヴァリニャーノの教育思想を語る場合、イエズス会の東アジアにおける最も重要な教育拠点とも

<sup>25</sup> 尾原悟『イエズス会の日本コレジヨの講義要綱』(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)(キリシタン文学叢書—キリシタン研究)、教文館、1998年、同氏「キリシタン時代の科学思想」『キリシタン研究』第10輯、1965年、平岡隆二『南蛮系宇宙論の原典的研究』、花書院、2013年参照。

いうべきマカオの聖パウロ学院（聖保禄学院）を抜きにしては語れないであろう。注15に列挙した文献のように、ヴァリニャーノが心血を注いで創設したこの学院については、近年、日本内外の学界から質の高い研究が行われ、多くの史実も解明されている。その中、一次史料の発掘にしても、史実の再構築にしても、今日なお最も優れているのは、やはり高瀬弘一郎の『キリシタン時代の文化と諸相』（八木書店、2001年）であろう。

とくに、高瀬は、マカオ聖パウロ学院を建てようとしたヴァリニャーノの意図を見事に読み解いたのである。すなわち、マカオ聖パウロ学院の創設は、無論、将来に備えて、日本人司祭の養成が最大な目標である。それならば、多くのイエズス会系学校が既存する日本国内でもそれが達成できるであろうし、何もマカオで新しい学院を作る必要はないだろう。しかしながら、多くの困難や反対に遭ったにも関わらず、ヴァリニャーノが学院創設の意志を貫いた。それは、建前上、マカオの独特な地理位置、日本の政情不安定が理由となるが、それよりも重要なのは、ヴァリニャーノの「適応政策」と通底する文化融合思想の現れとでもいうべきであろう。「日本人は彼ら固有の文化に固執する。従ってその中に生活していたのでは、ヨーロッパ人・日本人共にキリスト教の学問を修め、徳操を身に付けるのに支障となる。彼らを別の場所に一時移して、それに専念させることが必要である<sup>26</sup>」。つまり、言語、慣習、行動様式がそれぞれ違う日本人、中国人、ポルトガル人は共に自己の伝統的文化の基盤を持たない、いわば中性的な知の空間で一堂に集まるのは、文化理解や意思疎通がよりスムーズに行われる、という一見して素朴だが、実に時代を超えた、深い思慮のある発想であろう。そこから、ヴァリニャーノ教育思想における先進性、柔軟さの一斑を看取することができよう。

## 結びに代えて

冒頭に述べたように、大雑把に言えば、思想文化、教育制度を含めた知の有り様からみて、東アジアの近世期から近代期にかけて、朱子学の膨大な知識体系が漸次解体されていく歴史的過程である。そこには、当然、経学史（知識体系）自体の問題もあるが、何よりも最大な誘因は、やはりイエズス会経由の西学のそのものである。言い換えれば、イエズス会経由の西学が近世期の東アジアの伝統的学知に取り入れられ、朱子学という膨大な知識体系の一端を突き崩しながら、いわば、伝統的な学知の枠組みから捉えきれない新しい知の空間を生み出したのである。だが、これは実に途方もない複雑な問題群である。この巨大な問題群に、今の筆者が立ち向かっていく十分な知力を超えていると言わざるを得ない。そこで、東アジアでイエズス会の教育理念と実践活動（学校設立と運営）を主導したヴァリニャーノという稀有な存在を取りあげ、その教育思想の一端をめぐって初歩的な検討を付け加えたわけである。

---

<sup>26</sup> 前掲高瀬著書、216頁。



最後に一言贅言しておくが、いずれも、グランドデザイナーとしてのヴァリニャーノの存在を抜きにして語れないが、すなわち、イエズス会の宣教運動に伴う宗教信仰、神学思想を含む西学伝播の実態からみてみれば、日本では、各種のイエズス会系学校の設立と運営が非常に目立ち、これに対して、中国では、いわば「学術宣教」、つまり『天主実義』（マテオ・リッチ）や『幾何原本』（マテオ・リッチ、徐光啓）といった漢訳西学書のように、西洋ルネサンス期の神学、哲学をはじめ、数多くの科学技術の著書を漢訳したという手法が際立っている。日、中間におけるこうした相違がどのように生じたのだろうか。この興味深い問題の解明も、今後の課題としたい<sup>27</sup>。

---

<sup>27</sup> この点について、狭間芳樹は、かつて日、中両国のキリスト教ないし西学受容の土台はそれぞれ「仏教」と「儒教」の相違があった指摘したが、恐らく更に、学術用語としての日本語と漢文（中国語）自体への検討をも深くなされるべきではないと思われる。狭間芳樹「日本及び中国におけるイエズス会の布教方策：ヴァリニャーノの「適応主義」をめぐって」（京都大学文学部、文学部現代キリスト思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』第3号、2005年3月）、同誌第9号（2011年3月）高橋勝幸「『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』にみる A・ヴァリニャーノの適応主義布教方針」を参照。